



お金で買ってはいけないもの？

ハーバード大学白熱教室で有名なマイケル・サンデル教授の新著『それをお金で買いますか～市場主義の限界～』（早川書房、2012）を読んでいるが、とてもイイ本だし、もちろん易しくはないが難しすぎるということもないので、ぜひ、政治や経済を学びたいと思っている人は読んでみるとよい。また、採り上げられている例が、環境問題や生命倫理、教育といった方面に及ぶので、その方面を目指す人にも夏休みの読書用として推薦しておきたい。朝日新聞の書評でも採り上げられたばかりなので、先ずそれを一部引用してみよう。

*

世の中にはお金で買えないもの、売り買いしてはいけないものがある。にもかかわらず、ほぼあらゆるものが売買される。それでいいのかというのが著者の問いだ。

売買が妥当かどうか怪しいと思われる事例が、これでもかとはばかりに示される。米国の一部の刑務所では囚人が82ドルを払うと一晩きれいで静かな独房に入れる。カナダでは約6千ドルで北極地方のセイウチを撃つ権利が買える。

米国ダラスの成績不振校で本を1冊読む児童に2ドル払う制度は、低学力児の成績向上には役立つかもしれない。だが読書が金稼ぎ手段となれば本を愛する心を腐敗させてしまう、と著者は挑発する。

事例を読み進んでいくと、自らの思考停止に気づき、これまで漫然と受け入れてきたさまざまな市場や取引が「道徳的に正しいのか」

と考え直さずにはいられなくなるだろう。

たとえば、温室効果ガスを出す枠を売買する排出量取引。国連や欧州連合が導入し、環境派の人々や少なからぬメディアが「必要な市場」と信じ込んできた制度だ。

サンデルはこれにも「温室効果ガスを排出する『罪』を相殺することは正しいのか」と道徳面からの疑問を呈す。反論を試みようと思う読者もいるかもしれない。それこそ、講義の名手の狙いどおり、ということになる。

*

この本の中に、次のような面白い例が載っている。(p96)

保育所はよくある問題に直面していた。ときどき親が子供を迎えにくるのが遅くなるのだ。親が遅れてやってくるまで、保育士の一人が子供と一緒に居残らなければならなかった。この問題を解決するため、保育所は迎えが遅れた場合に罰金をとることにした。すると、何が起きたと思うだろうか…。

さて、何が起きたと思う？ 答えが知りたい人は、本屋さんでとりあえず96ページを立ち読みしてみるとよい。罰金を払わなければならないのだから、当然遅刻は減るだろうと考えるのが常識であるが、そうはならなかったのである。そしてそれはなぜなのか？

サンデル教授の解説（とはいっても、これはある研究を引用しているわけなのだが）は面白いし、説得力がある。そして、そこに「道徳」の重要さを教授は見ているのである。私もまったく同感である。